

中村 能盛
(言語学専門／博士研究員)

1. はじめに.

『種蒔く人』の誌面には、小牧近江と佐々木孝丸によってマルセル・マルティネの詩やアンリ・バルビュスの翻訳が掲載されていた。2 人は、1920 年代以降、フランスを中心とした文学作品の翻訳・出版も手掛けるようになっていた。一例として佐々木孝丸は 1922 年に『赤と黒』の全訳を、小牧近江は佐々木孝丸との共訳で 1924 年に『クラルテ』の全訳を行っていた。

本論では、欧文で書かれた実際の原書と、当時の日本の仏和辞典などを手掛かりとして、佐々木孝丸と小牧近江が手掛けた翻訳作品について分析する。そしてフランス文学のみならず、同時代における英文学の翻訳状況を、英語およびフランス語に共通した綴りの語彙を抽出した上で翻訳言語を比較し、1920 年代の翻訳の特質を見出したい。

2. 『種蒔く人』のフランス文学の掲載と同時代の仏和辞典.

19 世紀後半から 20 世紀中期の日本における仏和辞典の沿革については、1955 年に『スタンダード仏和辞典』が出版された際、鈴木信太郎による序文に詳述されていた。ので一部分を確かめたい。

[...] 其後二十世紀に入り、1905 年(明治三八)年に、公教宣教師ラゲ E, Raguet と小野藤太共編の「佛和會話大辭典」*Dictionnaire Français-Japonais* が、東京・ブリュッセル・パリの三書店を發行所として刊行された。この辭典に於いて初めて、各語がその語義によつて分類され細別され、數字記號の下に纏められて排列された、近代辭典の形態を整へたのである。但しラゲ師は、特に外國人の使用のために、漢字とローマ字によつて解釋を施したので、時には語のニュアンスが明確に掴み難く、一般日本人には甚だ讀みにくい文章となつた。1910 年(明治四三)年には野村泰亨の「新佛和辭典」が大倉書店から刊行されたが、これは片々たる小辭典にであつた。私がフランス語を習ひ始めた頃には、この辭典とラゲの「大辭典」とを頼りとする外はなかつた。これが明治時代及び大正初期の佛和辭書の有様だつた。1921(大正一〇)年に白水社から福岡易之助其他の著「模範佛和大辭典」*Nouveau Dictionnaire Français-Japonais* が刊行された。(中略) 本格的な辭典として單語を語義によつて分類して、それを解釋し例示する方式を採用してゐる [...] ¹。

¹ 鈴木信太郎 他・編 『スタンダード佛和辭典』大修館書店、1957 年、序文。

『模範佛和大辭典』が発売される直前の 1921 年 2 月に土崎版『種蒔く人』が創刊され、初号の誌面には、マルセル・マルティネの詩が掲載されていた。土崎版『種蒔く人』の第 3 号が刊行された 1921 年 4 月には、『模範佛和大辭典』が出版されているが、先行研究によれば、10 代半ばから長らく渡仏していた小牧近江は、帰国後にフランスの小説や戯曲などを翻訳する際に『模範佛和大辭典』を参照していた²。首都圏発ではなく地方発の文芸雑誌であった土崎版『種蒔く人』に、マルセル・マルティネの詩が掲載されたことは、すなわち 1921 年の時点でフランス文学の翻訳作品が地方の文芸雑誌に初めて掲載された史実でもあった。

3. 小牧近江と佐々木孝丸の面識。

半年後の 10 月に東京版『種蒔く人』として再刊された。東京版『種蒔く人』からは佐々木孝丸も執筆者として参加し、アンリ・バルビュス、ロマン・ロランそしてマルセル・マルティネの翻訳が数多く掲載されるようになった。

佐々木孝丸は自伝『風雲新劇史—わが半生の記—』に、小牧近江と佐々木孝丸の初対面に関する証言を残している。

前年第一回のメーデーは、上野両大師前の広場で野外集会があっただけで示威行進はなかった。それがこの二回目では芝浦から上野までデモ行進が行われたのである。(中略)危うく検束されかかったのを片袖破られながらうまく逃げのびて、山の上へ駆け上がった私は、そこに、小牧近江、村松正俊両君の姿を見出して、意外の感い打たれたのである。というのは、小牧も村松も、ハイカラな、高踏的な、貴族趣味の青年紳士で。メーデー騒ぎなどという、汗臭い俗世界に姿を現わすようなお人柄ではないと、一人ぎめに決めていたからであつた。だが、これは、完全に私の思い違いであることがすぐに分かつた。誘われるままに、青山二丁目の小牧のうちへ行き、夕飯を御馳走になりながらいろいろ話しているうちに、どうしてどうして私のような幼稚きわまる社会主義者—理論も何もない「感情的社会主義者」などと違つて、確呼たる信念と理論をもつた「筋金入り」であることが分り、しかもそういう人にありがちな、嵩にかかつて理屈をおつかぶせてくるというような態度はみじんもなく、いくぶん東北訛りのある言葉で、磊落に打ちくつろいで話相手になつてくれたので、私はあらためて、畏敬の念を深くしたことであつた。その晩私は、小牧が貸してくれた社会主義に関する、啓蒙的なフランス語の小冊子を数冊懐に入れて、ひどく張り詰めた、昂奮した気持ちを抱い雑司ヶ谷へ帰つた³。

² 北条常久 「フランス文化を日本に導いた福岡易之助」 『あきた経済』 一般社団法人あきた経済研究所、2019 年 11 月、p. 18。

³ 佐々木孝丸『風雲新劇史—わが半生の記—』、現代社、1959 年、pp.37-39。

1921年5月1日に上野で開催されたメーデーで、偶然、小牧近江と佐々木孝丸は知り合いとなった。東京版『種蒔く人』からは、佐々木孝丸もフランス文学の翻訳を手掛け、さらに随筆、童話、エスペラント語講座など様々な種類の原稿を掲載するようになった。

4. 『赤と黒』の翻訳に関する諸問題.

小牧近江に誘われ、佐々木孝丸は『種蒔く人』の同人になった翌年の1922年、「世界文藝全集」の8編と12編に、『赤と黒』の全訳を2巻に分けて新潮社から出版した。しかし大岡昇平も指摘しているように、一般的に1922年版の『赤と黒』は、誤訳が多いと酷評されているが、実際の原文と日本語訳を照合した上での詳しい分析が先行研究では散見されなかった。従って本節では、1922年に佐々木孝丸が翻訳を手掛けた『赤と黒』と原書、そして同時代の仏和辞典を用いて若干の考察を試みたい。

作家の大岡昇平は『赤と黒』に関して佐々木孝丸へ対談を申し込み、大岡昇平は、佐々木孝丸から『赤と黒』に関して下記の証言を聞き取りしていた。

昔のことをよく覚えておられた。アテネ・フランセを高等科までやり、秋田雨雀の紹介で、大正九年(1920年)に新潮社のエルテル叢書でミュッセの『二人の愛人』をやったのが縁で、同年中にシェンキーヴィッチの『大洪水』上・下を出したら、これがめっちゃめっちゃに売れたので、『赤と黒』もやることになった、という。底本はその頃フランスから帰って、雑誌『種蒔く人』を出した小牧近江が持ち帰った褐色の二冊本、ストリャンスキ校訂序文つきのラルース版(1911年)だった⁴。

小牧近江がパリで購入した1911年にラルース社から出版された『赤と黒』を佐々木孝丸が借用して翻訳を行っていた、と回想している。小牧近江がパリから持ち帰り、佐々木孝丸に貸与していた『赤と黒』の原書が、翻訳の際に使用された史実は、『種蒔く人』で言及された先行研究としては皆無に等しい。

当時のフランス文学者は、辰野隆、鈴木信太郎、豊島与志雄に代表されるように旧制高校時代からフランス語を1外で学習し、現在の東大文学部に入学後、フランス文学研究室で専門的な講義と演習を受講し、仏和辞典に掲載されていない語句は仏英辞典を参照して、『帝国文学』の誌面に翻訳や評論を掲載することが、当時の一般的な仏文学研究者の研究スタイルであった。自伝によれば戦前の旧制の小学校卒であった佐々木孝丸は、旧制高校に進学せず、通信局に勤務しながら1917年からアテネ・

⁴ 大岡昇平・著 大江健三郎、菅野昭正・編『大岡昇平全集 20』「大正のスタンダード」、筑摩書房、1995年、p.809。
下線は執筆者による。

フランセへ通い、フランス語を学習していた。途中懲役に就いていたので、語学の学習を中断していた時期もあり、フランス語の学習開始からわずか5年弱で『赤と黒』の全訳を取り掛かっていたこととなる。従ってほぼ独学でフランス語を修得していた、と考えられる。

次に1911年版のラルース社の原書と、1922年版の『赤と黒』を照合していくつかの問題点を抽出する。最初に、『赤と黒』の第2編の第25章の一部分を、1922年の佐々木孝丸による日本語訳と1911年のラルース社の原書に着目したい。

第2編.第25章・道徳課業

ラルース社・1911年版 Ce fut d'elle que Julien apprit que le marquis allait être ministre : il offrait à la Camarilla un plan fort ingénieux pour anéantir la Charte, sans commotion, en trois ans⁵.

佐々木孝丸訳・1922年版 侯爵が將に大臣にならうとしてゐるのをジュリアンが聞いたのは、この夫人の口からであつた。何等の攪亂無く、三年以内に憲章を廢止すべき巧妙な計畫を、宮廷黨へ提供した⁶。

la Camarilla と la Charte の2つの語彙が、当時の国内で使用されていた1890年代から1920年代まで幾度の改訂を続けていた『佛和會話大辭典』および『新佛和辭典』や、『模範佛和大辭典』にはどのような日本語として表記されていたのだろうか。

la Camarilla

1905年『佛和會話大辭典』・「※該当なし」

1918年『新佛和辭典』・「君側の朋黨」⁷

1922年『模範佛和大辭典』・「宮廷黨」⁸

la Charte

⁵ Stendhal ; introduction par Casimir Stryienski, *Le rouge et le noir*, Larousse, 1911, p. 302
以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

⁶ スタンダール著；佐々木孝丸・訳『赤と黒』後編(世界文藝全集第12編)、新潮社、1922年、p. 250。

以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

⁷ 野村泰亨『新佛和辭典』、大倉書店、1918年、p. 144。

以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

⁸ 柳川勝二[ほか]編『模範佛和大辭典』、白水社、1922年、p. 253。

下線は執筆者による。

以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

1905 年『佛和會話大辭典』・「menkyojyo」「ninkajyo」⁹

1918 年『新佛和辭典』・「特許状」「特典」「古法典」¹⁰

1922 年『模範佛和大辭典』・「憲章」「特典」「恩詔」「特許状」¹¹

2 つの語彙について着目すると、佐々木孝丸は『赤と黒』の翻訳の際に、語彙数が少なかった『新佛和辭典』や『佛和會話大辭典』ではなく、白水社の『模範佛和大辭典』に新出されていた日本語の意味を使っていた。そして旧制高校から東大仏文学講座に進学しなかった佐々木孝丸は、旧制高校の学生が使用していた仏英辞典に頼らず、既存の仏和辞典に掲載されていなかった意味を、多数掲載した『模範佛和大辭典』によって『赤と黒』を全訳できた、と解釈出来るだろう。

次に誤訳に関して考察を行う。1922 年の『赤と黒』の前編と後編には、佐々木孝丸によって執筆されたパラテキストが、本編の前後に合計 50 頁掲載されていた。前編のパラテキストにはスタンダールの代表作である *La Chartreuse de Parme* を『パレルモの女城主』と紹介していた¹²。『模範佛和大辭典』あるいは語彙の少ない『新佛和辭典』で確かめれば「女城主」ではなく、「修道女」と掲載されている。4 ヶ月後に後編が出版された際のパラテキストには、訂正の文言が記載されていたが何故、佐々木孝丸は正確に訳すことが出来るのにも関わらず、誤訳に陥っていたのか。この問題を整理するため、第 2 編の第 43 章のレナール夫人の信仰を巡る会話部分について着目した。

第 2 編・43 章

ラルース社・1911 年版 Je me coris pourtant pieuse, lui disait madame de Rênal dans la suite de la conversation. Je crois sincèrement en Dieu ; je crois également, et même cela m'est prouvé, que le crime que je commets est affreux, et dès que je te vois, même après que tu m'as tiré deux coups de pistolet...¹³.

佐々木孝丸訳・1922 年版 「私それでもやつぱり自分を信心深いと思つていますのよ。私はほんとうに神様を信じてゐます。さうして、あなたを一目見た時、

⁹ E. ラゲ・小野藤太『佛和會話大辭典』、三才社・Société belge de librairie、1905 年、p. 148

同書は、日本のみならずフランスとベルギーで出版されていたがゆえに、日本語の意味をローマ字で表記していた。本論では原文のまま、ローマ字で表記した。
以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

¹⁰ 『新佛和辭典』、p. 173。

¹¹ 『模範佛和大辭典』、p. 301。

下線は執筆者による。

¹² 『赤と黒』前編、序文 p.2。

¹³ *Le rouge et le noir*, p. 457.

私は自分の犯した罪の恐ろしさを思ひましたの。あなたから二度ピストルをうたれた時…¹⁴」

原文と佐々木孝丸の訳を照合すると、若干意識を交えているものの、日本語訳の構文は取れており、語彙の意味にも問題点が見受けられなかった。上記の点についてより深く検討するため『赤と黒』のみならず広域的に佐々木孝丸の1次資料を精査したい。小牧近江と会う前の土崎版『種蒔く人』には、佐々木孝丸は執筆者として参加せず、東京版『種蒔く人』から佐々木孝丸は執筆者に名を連ねるようになった。土崎版と異なり東京版『種蒔く人』には毎号、同じ序文が目次に掲載されていた。

嘗て人間は神を造った。今や人間は神を殺した。造られたものゝ運命は知るべきである。現代に神はいない。しかも神の變形はいたるところに充満する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである¹⁵。

佐々木孝丸は、上野のメーデーで出会って以来、小牧近江のクラルテ運動と『種蒔く人』に共感していたことは、明白な事実である。従って当時の佐々木孝丸は上記の宣言文から把握できるように、キリスト教に対して懐疑心や嫌悪感などを抱いていたことは、疑いの余地がない。一方で『赤と黒』にはキリスト教とナポレオンなどが、重要な作品のモチーフとして介在していた。従って佐々木孝丸は翻訳を行う際に、本文の解釈を損なわせることを回避させる代わりに、パラテキストの箇所で、自らの思想・信条を強調するために「意図的な誤訳行為」を行うことで、キリスト教に対する懐疑心や嫌悪感を示したかったのではないだろうか。

証左として佐々木孝丸のパラテキストには、下記の文言が記載されていた。

少くとも以上のヴォグエ(執筆者注・フランスにロシア文学を紹介した文学者)の所説と解説によれば、レアリスムと云ふものは、恐ろしく道徳的、人道的(この言葉の通俗的な意味に於て)なものである、彼はまるで、今日の某國政府が「過激」とも何とも云つてゐない普通の人の普通の思想を「取り締まる」ために、「過激思想取締法案」といふ反動的な化物を出さうとするやうに、スタンダールが道徳的だとも何とも云つてゐない『赤と黒』を、道徳的に反動的に非難したのだ¹⁶。

¹⁴ 『赤と黒』後編、p. 430。

¹⁵ 近江谷駒・編集兼発行人東京版『種蒔く人』第1巻第1号、種蒔き社、1921年10月3日、目次。

¹⁶ 『赤と黒』、附記 p. 37。

下線部の「某国政府」とは、紛れもなく戦前の日本を示し、「過激思想取締法案」とは、1922年にロシア革命の影響により社会主義運動を国内で規制する「過激社会運動取締法案」を示していることは、明白な事実であり、同時に国内の体制批判を密かに行っていたことも確認できる。次に小牧近江による『種蒔く人』の誌面に掲載された翻訳に関して、考察を試みたい。

5. 小牧近江が『種蒔く人』の誌面に掲載した翻訳.

本論の冒頭で示したように、『模範佛和大辞典』が出版される3か月前、土崎版『種蒔く人』の創刊号に掲載されていたマルセル・マルティネの翻訳と原文に関して着目したい。土崎版『種蒔く人』創刊号の7ページには、小牧近江がマルセル・マルティネの詩を翻訳した邦題「戦争に行くなら行ってみろ」が掲載されていたが、最後のセンテンスは次の通りである。

[...] それからだ、あの憐れな肉体と、恥辱を受けつづけた胸中と、
そら、お前の足下で、仲間、父、母ごちゃまぜな共同の墓穴をしつかり見るんだ。
さあ、戦争に行くなら行つて見ろ[...] ¹⁷。

『模範佛和大辞典』が発売される2ヶ月前の時点では、小牧近江は野村泰亨の編集による『新佛和辞典』を参照し、翻訳を行っていたと考えられる。下線部の「戦争に行くなら行ってみろ」に注目したい。マルセル・マルティネの原文は、小牧近江が帰国する際、日本に持ち帰った *DEMAIN*(以降、『ドゥマン』と表記)10号に掲載されていた。

[...] Et son corps misérable et son âme flétrie ;
Et ceci encor, devant toi,
Regarde la fosse commune,
Tes compagnons, tes père et mère...
Et maintenant, et maintenant
Va te battre ¹⁸!

Te battre(原形・se battre)は、英語であれば battle と類似する代名動詞であるが、フランス語の場合、意味は「打ち合う」「議論する」「戦う」である。仮に「戦争に行く」であれば、S'en aller à la guerre または Partir en guerre と表記および表現するのが

¹⁷ 近江谷駒・編集兼発行人 土崎版『種蒔く人』第1巻第1号、種蒔き社、1921年2月25日、p.7 下線は執筆者による。

¹⁸ Marcel Martinet, « Tu vas te battre... », *Demain*, n°10, 1916, p.207.

正しく、Te battre(原形・se battre)は、国家間の戦へ赴くのではなく、個人対個人の「議論」「打ち合い・喧嘩」を意味する表現となる。1905 年の『佛和會話大辭典』と 1918 年の『新佛和辭典』にはいかなる意味として記載されていたのだろうか。

Se battre

1918 年『佛和會話大辭典』・「uchi-au」「ai-utsu」¹⁹

1922 年『新佛和辭典』・「自ら打つ」「格闘する」「挑戦する」²⁰

小牧近江が『新佛和辭典』を手掛かりにしていたとしても、「戦争に行く」という日本語は、現代の視点で考えると原文からかけ離れた意味、あるいは誤訳となる。全文を閲読した限り、マルセル・マルティネの意図は、国家間への戦争ではなく、ヨーロッパにおける貧困層や地方における農民への迫害に対し、警鐘を鳴らす意味を込めた詩であった。

佐々木孝丸が『赤と黒』のパラテキスト上で、ヴォグエの論評を拡大解釈させ、当時の日本国内の体制批判を行っていたように、小牧近江もマルセル・マルティネの韻文を意図的に誤訳させることで、自分自身の思想を波及させようと企んでいた、と解釈出来る。

6. 1920 年代の「世界文学全集シリーズ」の英文学と仏文学における語彙の解釈。

日本国内では、大学におけるフランス文学研究は、1891 年から東大文学部における講座開設が起点となっていた。1891 年から 1921 年まで講座の主任教授であったエミール・エックはカトリック系修道会・マリア会の神父であり、講義や演習では、保守系作家であるモーリス・バレスや、クザビエ・ド・メストル、フェリシテ・ド・ラムネといったカトリック系作家を称賛し、他方では 19 世紀の写実主義や自然主義の作品を酷評していた。従って現代の視点から客観的に捉えるならば、フランス文学への視座が偏った講義と演習を行い、学生であった鈴木信太郎や辰野隆らも 1920 年代前半までは、エミール・エックの推奨する作家と作品の研究を『帝国文学』に掲載していた²¹。エミール・エックが東大を退官した 1921 年は、小牧近江と佐々木孝丸が『種蒔く人』の誌面上で、リベラル派や社会主義および共産主義思想を抱くフランスの作家の作品を翻訳で掲載し始めた時期でもあった。

佐藤(2014)によれば、1922 年に、新潮社が「世界文藝全集」を出版したことが起点となり、「円本」と称され価格の安さから売れ行きが伸び、複数の出版社から古今東西の代表作をまとめた「世界文学全集シリーズ」が出版されるようになっていく。

¹⁹ 『佛和會話大辭典』、p. 97。

²⁰ 『新佛和辭典』、p. 99。

²¹ 拙稿『日本のフランス文学受容に言語教材と修道士が果たした役割—1890 年代から 1920 年代を中心に—』(博士学位論文)名古屋大学、2020 年 3 月、pp.122-123。

1927年から1932年にかけて、新潮社は55冊の「世界文学全集」を出版していき、国内にも「世界文学」の概念が浸透していく時期でもあった²²。

小牧近江と佐々木孝丸は、在野の研究者であったがゆえに、ハードアカデミズムの主系に阿ることなく、『種蒔く人』をプラットフォームとしてフランス文学の翻訳と批評を行い、国内のプロレタリア文学の開祖となり、同時に波及者となったのは周知の事実である。前節までに考察した具体的な結果として、翻訳者が意図的な誤訳の行為を通して、戦前の国内の体制批判を見出した。

本節（以降）では、先行研究でも指摘されることの多い上記の55冊におよぶ新潮社の「世界文学全集」に所収された翻訳作品と原文との関係について、フランス文学に限らず、英文学も視野に含めて分析を行う。具体的には、1920年代の世界文学全集に所収されたシェイクスピアとスタンダールの作品から、英語とフランス語の両言語で綴りが類似し、軍術用語や戦記資料などで多用される combat(英: combat)と commande や comannder(英: command)などの語彙が、いかなる日本語による翻訳と解釈されていたかという点について、原書も一次資料として考察する。

新潮社の世界文学全集に所収されたスタンダールの『赤と黒』および、シェイクスピアの『ハムレット』より、combat(英: combat)が掲載されていたセンテンスの一部を確認したい。

『赤と黒』

原文・Ce n'était point sans combats que Mathilde avait écrit. Quel qu'eût été le commencement de son intérêt pour Julien, bientôt il domina l'orgueil qui, depuis qu'elle se connaissait, régnait seul dans son cœur²³.

訳・マチルドは何等内心の闘争もなく手紙を書いたのではなかった。ジュリアンに対する彼女の興味が、最初はどんなものであつたにせよ、とにかくそれは、彼女が物心づいて以来、ずっとその心を支配して来た自負心を制御したのである²⁴。

『ハムレット』

²² 佐藤美希「『円本』と翻訳文学規範」『翻訳研究への招待』No.12、日本通訳翻訳学会、2014年。

²³ *Le rouge et le noir*, p. 86. 下線は執筆者による。

²⁴ スタンダール著；佐々木孝丸・訳『赤と黒』後編(世界文学全集第2期第4)、新潮社、1930年、p. 326。下線は執筆者による。以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

原文・Was, as you know, by Fortinbras of Norway, Thereto pricked on by a most emulate pride, Dared to the combat; in which our valiant Hamlet ²⁵ —

訳・知つての通り、ノオルウェイ王フォーチンブラスに挑まれ給ひ、互に張り合ふ意地が募つて、例の一騎討を遊ばされた。その試合ひに當つて、わが勇敢なハムレット王は²⁶—

フランス語の combat と英語の combat は、1920 年代当時の国内で使用されていた主な仏和辞典と英和辞典などには、どのような日本語として掲載されていたのだろうか。

フランス語 combat

1918 年『新佛和辞典』・「交戦」「支戦」「闘戦」「試合」「比闘」「克己」「抵抗」²⁷

1922 年『模範佛和大辞典』・「戦闘」「試合」「決闘」「争闘」「軋轢」²⁸

英語 combat²⁹

1919 年『井上英和大辞典』・「戦闘」「格闘」「打合」「論戦」「争」³⁰

1919 年『模範新英和大辞典』・「打合」「闘争」「戦闘」「果合」「決闘」³¹

1928 年『新英和大辞典』・「戦」「戦闘」「闘争」「格闘」「論戦」³²

『赤と黒』を閲読すると combat に関しては「闘争」と翻訳され、『ハムレット』に掲載された combat に関しては「試合ひ」と翻訳されていた。従って combat をフランス語から日本語に翻訳した佐々木孝丸に限らず、英語から日本語に翻訳した横山有策も辞書の語句を翻訳作品に掲載せず、翻訳者が意図的に日本語の意味を若干、変更

²⁵ Shakespeare, William(ed. Henry N. Hudson. Harvard), *Hamlet*, The complete works of William ShakespeareXIV. Ginn.1881, p.148. 下線は執筆者による。以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

²⁶ シェイクスピア著；横谷有策・訳『沙翁傑作集』(世界文学全集 3)、新潮社、1929 年、p.5。下線は執筆者による。以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

²⁷ 『新佛和辞典』、p. 200。

²⁸ 『模範佛和大辞典』、p. 343。

²⁹ combat は名詞と動詞に分かれるが、本項目では名詞だけを抽出した。

³⁰ 井上十吉『井上英和大辞典』、井上辞典刊行會、1919 年、p.359。以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

³¹ 神田及武・共編『模範新英和大辞典』、三省堂、1919 年、p.351。以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

³² 岡倉由三郎・主幹『新英和大辞典[訂正版]』、研究社、1928 年、p.273。以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

していることが確認できる。そして横山有策よりも前に『ハムレット』を翻訳した坪内逍遙は、combat を日本語に翻訳していなかった³³。

次にフランス語の *commande* や *comannder* が『赤と黒』において、そして *command* や *comannder* などの語源から派生した語彙である英語の *command* が、『ハムレット』においてどの様に翻訳されているのかを確かめたい。

『赤と黒』

原文・Mais saint Paul fut payé par le plaisir de commander, de parler, de faire parler, de soi³⁴.

訳・が、使徒ポーロは、指圖をしたり、話したり、自分のことを話させたりすることの悦びによつて酬はれた³⁵。

『ハムレット』

原文・Set your entreatments at a higher rate than a command to parley³⁶.

訳・よしお招きがあつても、もつと高値をつけて、會議の招集でも受けたやうように、急いで飛んで行つてはならぬ³⁷。

combat 同様に、フランス語の *commande* および *comannder* や、英語の *command* が 1920 年代当時の国内で使用されていた主な仏和辞典と英和辞典などに、どのような日本語として掲載されていたのかを確かめたい。

フランス語 *commande*

1918 年『新佛和辞典』・「注文」「通動機」「義務的にて」「うはべにて」「虚偽にて」³⁸

1922 年『模範佛和大辞典』・「注文」「詔」「運動機圓」³⁹

フランス語 *commander*

1918 年『新佛和辞典』・「命令する」「指揮する」「司令する」「號令する」「注文する」「詔える」「統監する」*se commander*「自ら克つ」⁴⁰

³³ シェイクスピア著・坪内逍遙・訳『ハムレット』早稲田大學出版部、1909 年 p.7。

³⁴ *Le rouge et le noir*, p.223. 下線は執筆者による。

³⁵ 『赤と黒』後編、p.502。下線は執筆者による。

³⁶ *Hamlet*, p.170. 下線は執筆者による。

³⁷ 『沙翁傑作集』(世界文学全集 3)、p.20。下線は執筆者による。

³⁸ 『新佛和辞典』、p. 201。

³⁹ 『模範佛和大辞典』、p. 346。

⁴⁰ 前掲、同頁。

1922 年『模範佛和大辭典』・「言ひつける」「命令する」「號令する」「指揮する」「注文する」「誂へる」「見下ろす」「起こさせる」「促す」「御する」「制する」「抑える」se commander「おのれに打克つ」⁴¹

英語 command⁴²

1919 年『井上英和大辭典』・「命ずる」「言ひ附ける」「群を抜く」「管理する」「支配する」「指揮する(船・軍勢を)」「制する」「克つ」「自由にする」「左右する」「見晴らす」「見下ろす」「命令する」「指揮する」⁴³

1919 年『模範新英和大辭典』・「命令ス」「號令ス」「指揮ス」「支配ス」「管理ス」「監督ス」「見渡ス」「見晴ス」「見下ス」「衛ル」「掌握ス」「収得ス」「博ス」⁴⁴

1928 年『新英和大辭典』・「命ずる」「命令する」「號令を下す」「指揮する」「支配する」「掌握する」「霸権を握る」「制する」「意のままに従ふ」「自由に出来る」「起させる」「博する」「眼下に見下す」⁴⁵

坪内逍遙に師事していた英文学者の横山有策は、大正期におけるシェイクスピア研究者であり翻訳者でもあった。combat や command などを対象語彙にして考察した限り、横山有策は大正浪漫期において辞書の大幅な進歩と共に明治期の坪内訳とは異なった解釈を抱きつつも辞書に掲載された日本語の意味に捉われるだけではなく、意訳を交えた翻訳を行っていたことを把握することが出来た。

佐藤(2005)によれば、大正から昭和初期迄は、翻訳規範に則る翻訳とは異なる翻訳姿勢との「交渉」を通じて、翻訳そのものが複数の方向性を持って発展する可能性があったことを示している⁴⁶。横山有策の翻訳作品は、上記のコードの範疇に収まると考えられるのではないだろうか。

7. おわりに.

1920 年代の小牧近江と佐々木孝丸のフランス文学の翻訳作品を検証した限り、辞書の発展と進歩が、同時代の翻訳状況を豊熟な環境へと至ったことは自明の理であるが、彼らは日本語訳やパラテキストなどにおいて意図的な誤訳を行い、自らの思想を

⁴¹ 前々掲、同頁。

⁴² 名詞も含む語彙であるが、比較の都合により動詞の意味のみを掲載した。

⁴³ 『井上英和大辭典』、p.362。

⁴⁴ 『模範新英和大辭典』、p.353。

⁴⁵ 『新英和大辭典』、p.276。

⁴⁶ 佐藤美希「英文学研究と翻訳規範：W.B. イェイツ At the Hawk's Well の日本語訳から」『Sauvage：北海道大学大学院国際広報メディア研究科院生論集』1、北海道大学大学院国際広報メディア研究科院生論集制作委員会、2005 年。

流布させようと試みていた。そして古今東西の名作をシリーズ化させた 1922 年の「世界文藝全集」を起点として、1927 年から 1932 年にかけて 55 冊に及ぶ多数の名作の翻訳をシリーズ化させた「世界文学全集」には、シェイクスピアの戯曲も含め多数の英文学作品の分野などが多数所収し、テキストを概括しても明治時代ではなく大正時代の新訳を掲載し、より明瞭な日本語訳へと変容させていった。

今後の研究課題として、1930 年代から戦後にかけての翻訳の変容を英語とフランス語の 2 か国語間で同一の綴りや類似した綴りの語彙に着目し、言語学のみならずアダプテーションなども含有した分析の企図を明記した上で、本論の末尾とする。